

木簡研窗

第四号

木簡研磨

第四号



木 簡 学 会

題字
藤枝
晃刻

目 次

卷頭言——木簡保存法の思い出

一九八一年出土の木簡

概要
凡例

奈良・平城宮跡
奈良・奈良女子大学構内遺跡
奈良・法隆寺
奈良・藤原宮跡
京都・長岡京跡
京都・長岡京跡
京都・三条西殿跡
京都・鳥羽離宮跡
大阪・若江遺跡
大阪・佐堂遺跡
大阪・大阪城三の丸(大手口)遺跡

清田善樹・今泉隆雄	東野治之	坪井清足
清田善樹		
清水みき		
加藤優		
鈴木久		
上村和直		
阿部嗣治		
三宅正浩		
藤井直		

大阪・小曾根遺跡	柳本照男	坪井清足
愛知・尾張國府跡	北條誠示	
愛知・下津城跡	吉岡伸夫	
静岡・坂尻遺跡		
静岡・小川城跡		
長野・恒川遺跡		
群馬・三ツ川寺II遺跡		
栃木・下野國府跡		

大金宣亮・田熊清彦・木村等	小林正春	坪井清足
宮城・多賀城跡	佐藤則之	
宮城・郡山遺跡	木村浩二・平川南	
岩手・胆沢城跡	佐久間	
山形・道伝遺跡		
山形・笠原遺跡		

手塚	藤田有	
孝宣	賢	
手塚	藤田有	
孝宣	賢	

目 次

山形・明成寺遺跡	佐藤庄一	佐藤政文
山形・安田遺跡	福井・大森鍛冶遺跡	山口・長門国分寺跡
石川・高掌遺跡	石川・漆町遺跡(C地区)	和歌山・野田地区遺跡
石川・南吉田葛山遺跡	岡山・百間川遺跡群(原尾島遺跡)	和歌山・湯川神社境内遺跡
広島・草戸千軒町遺跡	岡田	福岡・大宰府跡(大福地区)
	志田原重人	福岡・九州大学(筑紫地区)機内遺跡
一九七七年以前出土の木簡(四)		福岡・辻田西遺跡
奈良・平城宮跡(第二二次南)	鬼頭清明	久貝健秀
奈良・平城宮跡(第二七次)	鬼頭清明	渋谷高秀
呪符木簡の系譜	奈良・平城宮跡(第二八次)	伊藤照雄
木簡と上代文学——水産物付札をめぐって	奈良・平城宮跡(第二九次)	和田靖彦
「漆紙文書」出土概要	鬼頭清明	倉住靖彦
	栗山伸司	栗山伸司
	和田翠	久貝健秀
	小谷博泰	渋谷高秀
	佐藤宗諄	伊藤照雄

凡例

一、以下の原稿は各木簡出土地の調査機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および訳文の記載形式については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、訳文下段のアラビア数字は木筒の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木筒の通し番号は最下段に示した。

一、訳文に加えた符号は次の通りである（五頁第一図参照）。

「」　木筒の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。
＜　木筒の上端・下端に切り込みのあることを示す。

□　抹消した字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。
□□　抹消により判読困難なもの。
□□□　欠損文字のうち字数の確認ができるもの。
□□□□　欠損文字のうち字数が推定できるもの。
□□□□□　欠損文字のうち字数の数えられないもの。

前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

異筆、追筆。

合点。

木筒の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

校訂に関する注で、原則として訳文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

編者が加えた注で疑問の残るもの。

文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

同一木筒と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

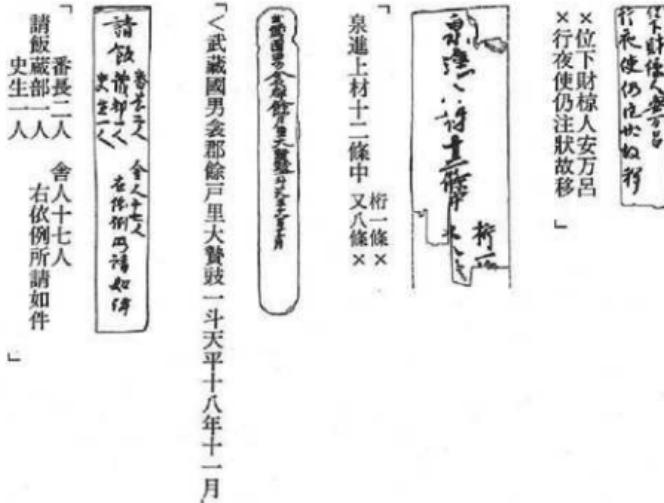
組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

しきの内に示した。地図中の▼は木筒の出土地点を示す。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し、国名を（）内に示した。地図中の▼は木筒の出土地点を示す。

〇II型式 短冊型。

- 015型式 矩冊型で、側面に孔を穿ったもの。
- 019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。
- 021型式 小形矩形のもの。
- 023型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。
- 025型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいたるもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。
- 026型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいたるもの。
- 028型式 長方形の材の一端に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。
- 029型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
- 030型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。
- 032型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
- 034型式 用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。
- 036型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。
- 038型式 削屑。
- 広島・草戸千軒町遺跡及び道照遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡一一』を参照されたい。



第14図 木簡証文の表現法

府台
主儀諸養

左可間給係事在台宜知

狀不適日時參照府達若詳據科此罪
萬大志火宅
萬吉阿多志

011型式

越國羽林和男作物鱗壹伯隻

奉十八年大萬萬稿

031型式

國國大祭朝天公孫心性阿那男御頭位二片

032型式

三郡林文昇中村里到着大人
三月吉食引書不在此

051型式

合十八
三月吉食引書不在此

011型式

御取號

033型式

中原生家

021型式

中原生家

031型式

中原生家

022型式

0 5 10 15cm

第2図 木簡の形態分類

奈良・藤原宮跡

- 1 所在地 奈良県橿原市四分町
2 調査期間 一九八一年(昭56)五月～一九八一年(昭57)三月
3 発掘機関 奈良國立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者 犬野 久
5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
6 遺跡の年代 七世紀末～八世紀初頭
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八一年度は宮の西南隅地域調査(第三四次)において木簡が一点出土したのみである。当地域は宮の西面大垣と南面大垣の接続部を含む場所で、面積一四六二畝を調査した。藤原宮時代の遺構は両大垣の他、西面内濠と南面外濠の接続部、西面外濠・南面外濠等である。両外濠の接続部分は民家があり、調査区外である。

西面大垣は七間分一九畳、南面大垣は六間分一六畠検出し、柱間寸法は二・七m(九尺)である。内濠は、幅は一・八m～二m、深さ〇・七mで北流し、堆積層は上・中・下三層あり、上層からは多量の瓦が出土したが、中・下層は遺物が少ない。

外濠は、北面や東面においては隋都と共に埋没したが、西面・南面においては一〇世紀頃まで水路として機能しており、流量も多く、

後世の氾濫と浸蝕により著しく拡大・変形している。西面外濠は二七m分を検出したが、幅一〇mにまでなる箇所がある。当初の流路を残している部分から推測すれば、下底部幅は五m程となる。南面外濠は二〇m分を検出し、溝幅は東端で六・二mあるが、溝下底では三mの当初の流路痕跡を残している。西半も二次的に溝幅が広がり、北岸は北西方に向かって斜行して西面外濠へ向う。深さは、南面外濠で一m、西面外濠の南端は一・三m、北端は一・六mであり、それぞれ西流し、北流する。西面外濠の堆積層は五層あり、底から灰色バラス、灰色粘土Ⅲ、灰色砂、灰色粘土Ⅱ、灰色粘土Ⅰの順である。

最下層の灰色バラス層は広がった溝の全域にあり、藤原宮期から平安初期までの遺物を含み、木簡もこの層から出土した。最上層からは一〇世紀の遺物が出土している。南面外濠の堆積層もほぼ同様である。外濠からの他の出土遺物としては、土器・瓦の他、等身大人形、削り掛け、陽物形板状品、曲物、槽、隆平永宝、延喜通宝、臘骨、桃核等の自然遺物、弥生時代の土器、銅鏡等がある。

8 木簡の釈文・内容

- 9 関係文献
- ・ × □ 欲□ミ□
・ × 五□八月十九×
- (24)×(26)×4 051

京都・三条西殿跡

さんじょうにしじの

1 所在地 京都市中京区烏丸通小路下ル場之町
2 調査期間 一九八一年(昭56)一月~五月
3 発掘機関 平安博物館

4 調査担当者 下條信行・植山茂・定森秀夫
5 遺跡の種類 郡城跡

6 遺跡の年代 平安時代~江戸時代

7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

発掘地は、平安時代後期に藤原摶闇家の邸宅であった三条西殿の東南角にあたる地点である。一九六九年に平安博物館が同所に二本

のトレンチを入れていて、

三条大路の北側側溝と烏丸小路の西側側溝と推定され

る溝が確認されていた。今回、全面的に発掘を行い、主に中・近世の土塹・井戸・瓦窯などを多數検出した



(京都東北部 2万5千分の1)

が、平安時代の遺構は極めて少なかった。

三条大路側溝としては、平安時代後期と推定される素振りの溝がある。さらに、その南側に室町時代後半~江戸初期と推定される石垣二本が重複して検出された。下段の石組溝は、石組の内側でさらには一段掘り下げられていて、埋土は暗青灰色粘質土となっていた。巡礼札はこの粘質土から出土し、室町時代後半と推定される。この上にさらに石組の溝があり、これは江戸初期まで使用されたと推定される。

8 木筒の跋文・内容

巡礼札は三枚検出され、それぞれ上端を尖り気味にし、孔を有している(番号は表裏面の番号と一致する。なお、跋文は藤本孝一氏に御願いした)。

(1) 「西國卅三所順礼」

(2) 「西國卅三所順礼同行二人」

(3) 「西國卅三所順礼同行一人」

この種の巡礼札は伝世品として、岩手県中尊寺、栃木県靈巖寺、滋賀県石山寺などに残っている。なお、当遺跡のすぐ近くに西國第十八番札所である六角堂(頂法寺)がある(地図参照)。

9 関係文献

白石太一郎・伊藤玄三・近藤喬一「平安京三条西殿跡 発掘調査報告」(『平安博物館研究紀要』3) 一九七一年

1981年出土の木筒



定森秀夫「国版解説・三条西殿跡出土の巡礼札」

(『古代文化』33—12)

一九八一年
(定森秀夫)

木簡研究第二号

巻頭言——木簡と墨書き器——

平野 邦雄

一九七九年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京三条二坊宮跡庭園跡
藤原宮跡 藤原京条坊関連遺構 長岡京跡 平安京左京
内膳町跡 国府遺跡 大阪城三の丸(京橋口)遺跡 木津
氏郷跡 下津城跡 城山遺跡 新倉郷跡 鴨遺跡 穴太
遺跡 服部遺跡 煙田磨寺跡 下野国府跡 道伝遺跡
松田橋跡 草戸千軒町遺跡 尾道市街地遺跡 安芸国分
尼寺伝承地 久米塙田Ⅱ遺跡 金光寺跡

一九七七年以前出土の木簡(一)

平城宮跡(第一三次・第一六・一七次・第一八次・第二〇次)

周防鈔錢司跡

木簡と大宝令

中国における雲夢秦簡研究の現状

袖井遺跡出土の木簡

案報

岸 俊男
永田 英正
柴原永遠男

(表題僅少) 領価 三五〇円
平四〇〇円



(大阪西北部)

大阪・小曾根遺跡

数棟、井戸、土壙、溝などで、弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。

- 1 所在地 大阪府豊中市北条二丁目一七九番地
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)一〇月~一月
- 3 発掘機関 豊中市教育委員会

- 4 調査担当者 橋本正幸・柳本照男

- 5 遺跡の種類 住落跡

- 6 遺跡の年代 弥生~鎌倉時代

- 7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

小曾根遺跡は豊中市の東南部にあたり、かつては小曾根村と称され、北は千里丘陵、南及び東西は河川で区切られた沖積平野、標高約二・五m前後に立地する。

今回の調査は共同住宅建設に伴って実施したものである。検出した遺構は弥生時代前期の柱穴跡、同じく中期の方形周溝墓、平安時代後半から鎌倉時代にかけての掘立柱建物

mを測る大形で擂鉢状を呈している。出土した遺物は木筒類をはじめとする木製品の他、土器類、金属製、種子類などの多量の遺物が出土している。年代は今のところ大まかに十二世紀代と捉えておく。

- 8 木筒の积文・内容

「蘇民将来□□□□

(172)×24×6 039

(柳本照男)

愛知・尾張國府跡



(名古屋北部)

る多種類の遺物が出土している。

一九八一年度の調査は、総社である尾張國靈神社周辺の二か所で実施した。木簡を出土した稻沢市国府宮町大割では、柵一条、井戸一基、溝三条、近世土礫墓一基などが検出され、須恵器、土師器、灰釉陶器（陰刻文長方瓶）、綠釉陶器、中国陶磁、中世陶器、土製品、石製品（石帯）、銅製品、鉄製品などが出土した。

木簡は、一二世紀に廃絶したと考えられる井戸（兼掘り？）より出土した。

8 木簡の収文・内容

出土した木簡は一点で、両側面が欠損している。



9 × (18) × 1 011

- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
尾張國府跡は、木曾川の支流三宅川が大きく蛇行する右岸の自然堤防上に立地し、標高六七mを数える。

発掘調査は、一九七七年（昭52）度より毎年継続して実施しているが、直接政府跡と断定できる遺構は検出されていない。

しかし、乾元大宝の入った細頸瓶、綠釉円塔、各種陶鏡など國府の所在地であった可能性を裏付け

9 関係文献

稻沢市教育委員会

『尾張國府跡発掘調査報告書IV』

（稻沢市文化財調査報告XV）

一九八一年
（北緯歴史）



(名古屋北部)

城主織田敏広は国府宮へ
文明八年(一四七〇)織田
敏定によって城が焼かれ、
下津城跡は、尾張國府跡の東一・五kmに位置し、木曾川の支流青

- 1 所在地 愛知県稲沢市下津町高戸
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)七月～一九八二年(昭57)三月
- 3 発掘機関 稲沢市教育委員会
- 4 調査担当者 岩野見司
- 5 遺跡の種類 城跡
- 6 遺跡の年代 錦倉・室町時代
- 7 清跡及び木簡出土遺構の概要

度の調査は、六か所の発掘区を設け、推定本丸・二の丸跡の堀、二の丸・三の丸跡の堀、三の丸西端の堀、土器通り、土塙群等が検出された。堀の肩には護岸用と考えられる杭列が残存していた。出土遺物は、木製品(木筒、漆器、曲物、櫛、箒)、瓦(軒平瓦)、土師器、中国陶磁、中世陶器、土製品、石製品、銅製品等である。

木筒は、二の丸・三の丸跡の堀、三の丸西端の堀の二か所で出土した。

8 木筒の釈文・内容

(1) 「南無阿弥陀佛 為妙珍」

(2) 「頂頭又是速得往生為常久

(3) 「頂頭又是速得往生為常久」

頭部は五輪塔状。

出土した木筒は一四点で、うち四点(1)～(4)は筆塔蓋、七点(5)～(11)は筆状の材に墨書きしたものである。

(1) 「南無阿弥陀佛 為妙珍」

(2) 「頂頭又是速得往生為常久

(3) 「頂頭又是速得往生為常久」

頭部は五輪塔状。

320×25×2 061

(484)×21×2 061

488×33×5 061

愛知・下津城跡

退いた。

頭部は五輪塔状。

×道□×

(4)



(6.1) × 20 × 2 061

032



(262) × 11 × (3) 065
267 × 11 × (3) 065

(5)



(6)



(5)



(4)



(3)



(2)



(1)



(71) × 22 × 2 019

9 関係文献

福沢市教育委員会

『福沢市の木製品』

(福沢市文化財調査報告書XIV)

一九八一年

福沢市教育委員会

『下津城跡発掘調査概要報告書III』

(福沢市文化財調査報告書XVI)

一九八一年

(北條歴史)



木筒(1)



木筒(2)

『但馬國分寺木簡』の刊行

但馬國分寺跡からは、一九七七年に寺城東南隅の外郭築地の内、外溝から三六点の木簡が出土している。すでに第三回木簡研究集会で報告されているが、昨年十二月兵庫県日高町教育委員会から、その正式報告書が刊行された。但馬國分寺木簡は、これまで国分寺跡出土の木簡として唯一の例である上、内容的に興味深いものを含み、ただに但馬國分寺研究のみならず、國分寺研究にとって貴重な史料となるものである。年代は神護景雲年間で、文書・荷札・留書などを含み、同時期の同寺の具体的な活動が知られるが、特に同寺の諸施設を記したものは同時期の造営状況を明らかにできる点で興味深い。これまで諸國分寺の中で時期を限ってその造営の状況が知られる例はなく、八世紀後半における國分寺の成立の問題を考える上で大きな意義をもっている。報告書は、釈文・図版をのせ、総説では前に述べた問題を論じている。さらに参考資料として、墨書き土器と他遺跡出土の但馬國關係木簡の集成を付載する。

但馬國分寺跡発掘調査團編『但馬國分寺木簡』(A4版 本文

三三頁 ポロタイプ 図版一四葉) 領価二千円 送料四百円

△申込先／真鷗社

T六〇〇

京都市下京区油小路仏光寺上ル
振替口座 京都七一八二六七

長野・恒川遺跡



(飯田)

恒川遺跡は、飯田市街から北東へ約五kmの天竜川河成段丘の低位段丘上に位置している。

- 1 所在地 長野県飯田市鹿光寺恒川
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)二月～一九八二年(昭57)三月
- 3 発掘機関 飯田市教育委員会
- 4 調査担当者 大沢和夫
- 5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生～歴史時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
恒川遺跡は、飯田市街から北東へ約五kmの天竜川河成段丘の低位段丘上に位置している。
- 8 木簡の収文・内容

「長□×

(211)×32×5 019

出土層位が確定できないが、伴出遺物からみて八世紀～十一世紀にかけてのものである。

(小林正春)

川遺跡は、遺跡群の中心的な位置にある。

遺跡群は、弥生中期末以降の連続する集落跡であり、各期毎に相当量の遺構・遺物が検出されている。このうち、奈良・平安時代にかけては、広範囲にわたり掘立柱建物群が確認された。

出土遺物には、和同開珎銀錢・金銅装飾・師脚鏡・円面鏡などが出土した。また、木簡は、恒川遺跡のほぼ中央にある湧水により形成された湿地帯より、多量の土器類・木製品類とともに検出された。

ある。

発掘調査は、鹿光寺地区を通過する国道一五三号線のバイパス建設に伴つて行つた。バイパス建設用地のうち約一〇〇〇mに弥生～近世に至るまでの遺跡が連続してあり、全体を恒川遺跡群として記されている。このうち恒

宮城・多賀城跡

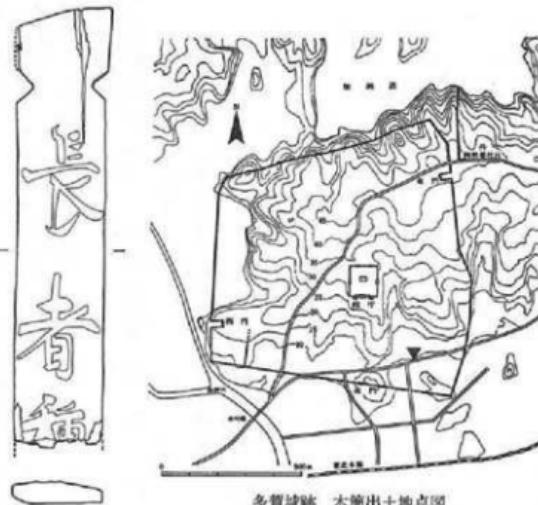
にこれと直交させて同様の杭材を密に並べ、その中央部に面取りした材木を据えて盛土したものである。盛土には二時期あり、第一次盛土が崩壊して周囲に黒褐色粘土層が堆積した後、第二次盛土がなされている。

- 1 所在地 宮城県多賀城市市川・浮島
- 2 調査期間 一九八〇年（昭55）四月～六月
- 3 発掘機関 宮城県多賀城跡調査研究所
- 4 調査担当者 佐藤則之ほか
- 5 遺跡の種類 国府跡
- 6 遺跡の年代 奈良～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

多賀城跡は古代陸奥國府跡で、奈良時代には鎮守府も併置されていた遺跡である。遺跡は仙台平野の東北端に位置し、海拔二〇m～五〇m程の小丘陵上に立地しており、一部は海拔四m程の沖積地にも及んでいる。周囲には方約九〇〇mの範囲に築地が巡らされており、そのほぼ中央に政庁がある。

第三八次調査は政庁の東を刻む谷の出口にある作貢地区南端の沖積地を対象として実施した。調査の結果、現在の地表下約三・五mで、区画施設の基礎地業とみられる遺構を検出した。

この遺構は杭材を數き並べた東西に延びるいかだ地業と、その両側でこれと並行して延びる打ち込みの丸太列とからなる。いかだ地業は、まずスクモ層上に杭材を東西に三列並べ、その上



多賀城跡 木簡出土地点図

これらのいかだ地築と打ち込みの丸太列はこの地域一帯がスクモ層が形成されるような軟弱地盤の低湿地であったため、区画施設築に際して行なった基礎地築であろうと考えられる。

木筒は第一次盛土と第二次盛土に挟まれる自然堆積の黒褐色粘土層中より出土した。この層からは他に一端の左右に切り込みのある木筒様木札四点、曲物などの木製品、土師器、須恵器、瓦などが出土している。なお、この層は一〇世紀前半頃に降下したと思われる灰白色火山灰に覆われていること、層中にロクヨ土師器杯が含まれていることなどから、ほぼ九世紀代に堆積したものと思われる。

8 木筒の転文・内容

「長者」
〔種ノ〕

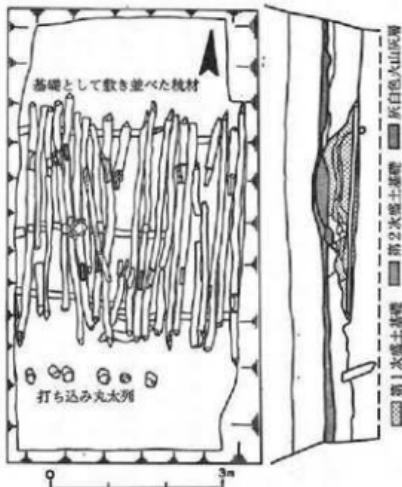
(196) × 39 × 9 (38)

柱板を素材としたもので、頭部は斜めに削られており、上端から約三・五cm下の左右に切り込みがある。横断面形は中央部がやや厚い凸レンズ状で、上端の一部と下端は欠損している。表面は風化が著しい。墨痕はほとんど残っておらず、文字部分のみがわずかに浮出している。文字は大きめの楷書で、切り込みの下から書き始め、文字の間隔はそれぞれ異なる。

9 関係文献

宮城県多賀城跡調査研究所年報一九八一

一九八一年
(佐藤則之)



多賀城跡第38次発掘調査区造構図

岩手・胆沢城跡

いさわじょう

- 1 所在地 岩手県水沢市佐倉河字二月外
- 2 調査期間 一九八一年（昭56）七月～一〇月
- 3 発掘機関 水沢市教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤博幸・佐久間賢（社会教育課）
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



胆沢城跡第三九次調査は内城の北東に位置する「北方官衙」東地区にある。官衙北方には城内を流れ東方の北上川に開口する九蔵川があり、今回の調査地区はこの九蔵川上流約三〇〇mの舟塗とよばれる旧氾濫原に面している。

検出した遺構は獨立柱建物、柱列、井戸、溝、土壙などでA～D期の四期に大別でき、C期はC～C期に細分される。A期は九世紀

前半の小規模な溝・土壙などで、漆紙文書（延喜二三・二三年真注屏断簡）を出土したSD五五六、SD五七六、SK五五五などで調査区内の大半は空間となっている。B期になると建物が造られ、調査区北西のSB五八一・SA六〇〇、南東のSB五六〇が現われる。C期は一〇世紀前半を上限とし、北廻の東西棟建物SB五九〇を中心とし、SE五七三井戸をもつ建物で構成される。C期にSB五九〇A、SB五八〇、C期にSB五九〇B、D期にSB六〇四が属す。

C期のSE五七三井戸中層堆積土から木簡が一点出土した。井戸は深さ二・四mあり、幅〇・四m、長さ一・四m程の板を組み合せた井桁が四段まで遺存している。井桁内の層には水性堆積の非常に薄いシルト層が間層として数枚確認され自然堆積の状況を示した。井戸底に礫が数個みられた他は遺物の出土がほとんどない。遺物は底面に於る最下層から上の各層で、植物種子、加工材などの他、多量の須恵系土器が出土した。土師器、須恵器の伴出はきわめて少ない。各層の須恵系土器の様相に大きな変化は認められなく短期間の埋没と解される。ただ、焼成が還元状態に近いものが多くみられるとともに、外郭南門地区で判明した新らしいグループに属す合付皿の出土を認めない等、須恵系土器のなかでも比較的古いグループと思われる。なお、遺存する井桁から上は人為的堆積で、層中に須恵系土器などの他、漆紙の付着する土師器杯がみられた。

〔柴ヶ
田郡白木郷中臣秋×

・進

SE五七三中層より須恵系土器と併出した。四つの破片を接合したもので下端は欠損している。积文は平川南氏の判読による。

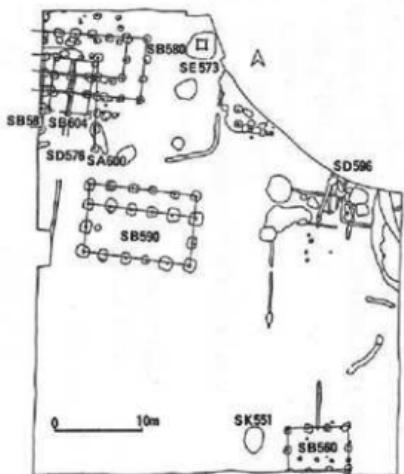
9 関係文献

水沢市教育委員会

「胆沢城跡—昭和五一年度発掘調査概報」
同 「胆沢城跡—昭和五六年度発掘調査概報」

一九七七年
一九八二年
(佐久間賀)

(80)×15.91×6.03



胆沢城跡第39次発掘調査遺構配置図



胆沢城跡第39次発掘調査区(斜線部)

山形・明成寺遺跡



(酒田)

明成寺遺跡は、国指定史跡「城輪塚跡」の北方一・二回に位置する。日向川・荒瀬川の合流地点より五〇〇m上流の荒瀬川左岸、旧氾濫原上に立地しており、標高一〇mを測る河間低地中の微高地である。発掘調査は、農林事業に係わる用排水路の部分に限定して行った。調査の結果、井戸跡一基、性格不明の落ち込みなどの遺構が検出されている。

- 1 所在地 山形県酒田市大字豊川字明成寺
- 2 調査期間 一九七九年（昭54）六月～七月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 川崎利夫・野尻侃
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 平安～江戸時代
- 7 遺跡及び木筒出土遺構の概要

木筒は、発掘区の北西部S-X-1とした長径一〇cm、短径六〇cm、深さ一五cmの不整梢円形の落ち込みから三点重なった状態で検出されている。その他、この近くから同じ材質の残片が三点出土しているが、墨書は認められない。

- 8 木筒の状況・内容
 - (1) 「各以衣械盛衆妙華供養他方十万億佛即
〔因縁〕」
(165)×15×1 061
 - (2) 「以食時還到本飲食經行舍利弗極樂國
〔功德〕」
(187)×14×1 061
 - (3) 「主成就如是德故
〔功德〕」
(177)×13×1 061

三点の木筒は、いずれも下端が欠損しているが、上部は山型に削つてある。祝文の内容は、「阿弥陀經」卷上の通続した三行にあたる。木筒の性格は、形態ともかね合せ、経文を墨書きした柿経と考えられる。木筒の時期は、木筒および木製品以外の伴出遺物がないため明らかでない。

9 関係文献

- 青山委員会『若王寺遺跡・明成寺遺跡・三田遺跡発掘調査報告書』
山形県埋蔵文化財報告書第32集
一九八〇年
長橋至「酒田市明成寺遺跡出土瓶等婆もしくは柿経」
『庄内考古学』第17号
一九八〇年
(佐藤庄一)

1981年出土の木簡



(酒田)

山形・安田遺跡

部の遺物包含層から二点検出しており、周囲にはとくに落ち込みのような遺構は認められなかった。

8 木簡の本文・内容

木簡は、柿經の断簡が二点検出されている。

(1) 〔人^ノ〕聞是經典如說循行
(87) × 11 × 0.3 061

(2) 「故世世得善知識其[×]
スギ材。下端欠損。上端圭頭。

(102) × 11 × 0.9 061

- | | |
|-------|-----------------|
| 所在地 | 山形県酒田市大字安田字芳岡 |
| 調査期間 | 一九八一年(昭56)六月~七月 |
| 発掘機関 | 山形県教育委員会 |
| 調査担当者 | 佐藤庄一・野尻侃 |
| 遺跡の種類 | 集落跡 |
| 遺跡の年代 | 平安~室町時代 |

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

安田遺跡は、国指定史跡「城輪古跡」の南西約5kmに位置し、標高8~9mの河間低地中の微高地に所在する。本遺跡は通称地蔵

寺部落内の東半分を含む

広い範囲にまたがること

が予想されるが、発掘調

査は農林事業に係わる地

域に限定して行った。調

査の結果、獨立柱建物跡

四棟、土壇六個所などの

遺構が検出されている。

木簡は、発掘区の北西

- (1) 〔人^ノ〕聞是經典如說循行
人聞是經典如說循行」という行があり、その一部を示す。
(2) 「妙法蓮華經」卷第八、陀羅尼品第二六に、「故世世得善知識其善知識作佛事示教」という行があり、その一部を示す。

木簡の時期は、包含層中の出土であるため断定はできないが、伴出した珠洲系陶器などから鎌倉~室町時代頃に想定される。

9 関係文献

山形県教育委員会

「安田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文
化財報告書第56集

一九八一年
(佐藤庄一)

訂正とお詫び

「木簡研究」第三号の「一九八〇年出土の木簡 石川・白山橋遺跡」に掲載致しました四五頁の図版の説明「白山橋遺跡 一号土塁」は、「桙町遺跡 一号土塁」の誤りでした。ここに訂正するとともに執筆者 読者各位に深くお詫び致します。

『草戸千軒—木簡—』の刊行

広島県福山市の芦田川の中洲に所在する中世集落・草戸千軒町遺跡からは、一九六九年の第五次調査以来これまで約四千点の木簡が出土している。これらの木簡は同遺跡の解明はもとより、中世の商業史や信仰・習俗を明らかにする具体的な資料である上に、なによりも古代木簡に対する中世木簡の特質を考えるまとまった資料として貴重である。この木簡の正式報告書が本年三月広島県草戸千軒町遺跡調査研究所から刊行された。報告書は第五次調査から一九七八年第二六次調査までに出土した三千八百点余のうち断片・削屑を除く二六三点を収載する。総説では遺跡の概要、木簡の出土遺構などとともに、第二回木簡学会で報告された中世木簡の形態と記載内容の特質について論じている。

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

『草戸千軒町遺跡研究資料一 草戸千軒—木簡—』

(A4版 本文六〇頁 図版六〇葉 領価四千円(送料込))

八申込先／福山市花園町一ノ五ノ二 広島県草戸千軒町遺跡調査研究室内 広島考古学研究会(振替口座 広島九一六九三)

木簡研究 第三号

卷頭言——中国簡體呼称についての提言——

大庭 僥

一九八〇年出土の木簡

大庭 僥

概要 平城宮・京跡 平城京左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮
跡 稗田遺跡——下ノ道—— 長岡京跡 大藏司遺跡 西沖遺跡

御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 桜

町遺跡 白山橋遺跡 御船遺跡 御着城跡 鶴・城山遺跡 草戸

千軒町遺跡 野田地区遺跡 観世音寺僧房跡 大宰府学校院跡 東

辺部

一九七七年以前出土の木簡 (二)

平城宮跡(第二次・第三次北) 薬師寺 下岡田遺跡

中國における簡牘研究の位相

池田 直
狩野 久

庸米付札について

静岡県城山遺跡出土の具注庸木簡について

原秀三郎
志田原重人

案報

額価 三五〇〇円 ■四〇〇円

木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と稱する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及

をはかり、史料としての活用に資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つぎの事業を行なう。

1 研究集会の開催

2 会誌「木簡研究」その他の刊行

3 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡およ

び協力

5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要と

し、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合に

は、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

1 会長一名

2 副会長二名

3 委員若干名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。

ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもとづき会務を処理する。

三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金をもってて、総会におい

て会計報告を行なうものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十二条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

彙報

木簡学会第三回総会および研究集会

第三回木簡学会総会と研究集会は例年どおり、十二月の第一土曜日、日曜日にかけて行なわれた。場所は、奈良國文化財研究所平城宮跡資料館の講堂を使用した。参加員は一〇〇名近く、総会・研究集会とも充実した討議が行なわれた。研究集会は第一日三名、第二日四名の報告を行ない、それをめぐって討論が行なわれたが、

橋本・石川等の地方の木簡や中国簡の書風の問題なども含めて幅広い内容の研究集会となつた。さらに、当日は会場に下野國府跡や、石川県高堂遺跡などの木簡が遠方から運び込まれ、参加者は木簡を目のあたりにして検討を進めることができ、研究集会の内容を一段と深めることができた。いつもながら、各発掘担当者・機関等の御好意に厚く感謝したい。

◇十二月二日（土）午後一時五分から第三回総会が始められた。

第三回総会（議長 北村文治氏）

岸俊男会長の挨拶のあと、北村文治氏を議長に選出して、総会議事を進めた。

会務・編集報告（佐藤委員）

本学会の一年間の会務活動と会誌編集について、次のような報

告があり、異議なく了承された。会務報告は、まず会員数が順調に増加していることを述べ、昨年度大会時にくらべて新入会員が一二名となり、総会の時点で一五四名になったことが報告された。編集については、会誌第三号を一〇〇〇部印刷したこと、また第二号を三五〇部増刷したこと、また一九八〇年、八一年の出土木簡については、各地の諸機関の御協力によって情報を受け取収集したことなどが報告され、さらに会誌の充実のために会員からの積極的な投稿が望ましい旨報告があり、投稿規定を決めることとなつた。

会計報告（岩本委員）

一九八〇年度（一九八〇年四月～八一年三月）の会計について、収支決算の報告と説明が行なわれた。また八〇年度会計については、八一年六月五日に監事の関晃氏・土田直鎮氏によって監査が行なわれ、帳簿類は誤りなく整理され、会計執行が正當に行なわれた旨、土田氏より報告が行なわれ、異議なく承認された。

総会の後、二時半より研究集会が開催された。

研究集会（議長 青木和夫氏）

居延の草書簡

呪符木簡の系譜

庸木付札について

狩野 久

藤枝 晃
和田 草

藤枝報告は永年にわたる氏による木簡の調査・研究を通じての

内容で、漢簡では数少ない草書木簡の機能的な特質を解明したもので、日本簡の即物的な研究には示唆するところの大きなものであった。和田報告については『木簡研究』第四号(本号)に収載することができた。また狩野報告はすでに第三号に収載されており、参加者は会誌を参照しつつ報告を聞くことができた。

◇十二月三日(日)

研究集会(議長 原秀三郎氏)

前日にひきつづいて、研究集会が行なわれた。報告は次の四本であつた。

最近の各地遺跡出土の木簡

石川県小松市高堂遺跡出土の木簡について 田熊清彦・平川南

下野國府出土の木簡について 佐藤信

一九八一年の平城宮跡出土木簡

この四つの報告はいずれも本号に内容の一部を収載している。

また、昼食時の休憩時間を利用して、平城宮跡内の発掘現場(第一三三次)を見学した。発掘地点は宮南面西門付近で、木簡が出土した二条大路北側溝等をみることができた。

委員会報告

◇一九八二年六月一七日

第四回木簡学会総会・研究集会の日程・報告内容について検討

し、『木簡研究』第四号の編集方針の大要を決めた。また、新規入会申し込み者については四名の方々の申し込みを受理して、入会を承認した。なお、一九八一年度の会計報告があり、検討され、大会までに監査をうけることとした。

◇一九八二年十月三十日

第四回木簡学会の総会・研究集会の内容・日時をほぼ確定した。また、『木簡研究』第四号の編集経過が報告され、ほぼ、頒布据え置きで刊行できる見通しであることが指摘された。さらに新規入会者としては二名の申し込みがあり、承認された。また、今年度は委員の改選時期に当るため、大会に提出すべき役員の候補について若干討議がなされた。

木簡学会 役員

会長 岸俊男

副会長 大庭脩・平野邦雄

委員 青木和夫

門脇慎二

佐藤宗譲

坪井清足

直木孝次郎

早川庄八

監事 関晃

土田直鎮

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 4 1982

CONTENTS

Foreword	Kiyotari Tsuboi	i
Wooden Documents Excavated in 1981		1
Outline		
Explanatory Notes		
Nara Palace Site, Nara Prefecture; Remains in Nara Women's University, Nara Prefecture; Remains of Hōryūji Temple, Nara Prefecture; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture; Site of Nagaoka Capital, Kyōto Prefecture; Remains of Sanjō-nishi-dono, Kyōto Prefecture; Remains of Toba-rikyū, Kyōto Prefecture; Remains of Wakae, Ōsaka Prefecture; Remains of Sadō, Ōsaka Prefecture; Remains of San-no-maru of Ōsaka Castle Site, Ōsaka Prefecture; Remains of Ozone, Ōsaka Prefecture; Site of Owari-Kokufu, Aichi Prefecture; Remains of Orizu Castle Site, Aichi Prefecture; Remains of Sakajiri, Shizuoka Prefecture; Remains of Kogawa Castle Site, Shizuoka Prefecture; Remains of Gonga, Nagano Prefecture; Remains of Mitsudera ॥, Gunma Prefecture; Site of Shimotsuke-Kokufu, Tochigi Prefecture; Remains of Tagajō Castle, Miyagi Prefecture; Remains of Kōriyama, Miyagi Prefecture; Remains of Isawa Castle, Iwate Prefecture; Remains of Dōden, Yamagata Prefecture; Remains of Sasahara, Yamagata Prefecture; Remains of		

Myōjōji, Yamagata Prefecture; Remains of Yasuda, Yamagata Prefecture; Remains of Ōmori-Kaneshima, Fukui Prefecture; Remains of Takandō, Ishikawa Prefecture; Remains of Urushimachi, Ishikawa Prefecture; Remains of Minamiyoshida-Kuzuyama, Ishikawa Prefecture; Remains of Hyakkengawa, Okayama Prefecture; Remains of Kusado-Sengen-Chō, Hiroshima Prefecture; Remains of Dōshō, Hiroshima Prefecture; Remains of Nagato-Kokubunji Temple, Yamaguchi Prefecture; Remains of Noda-Chiku, Wakayama Prefecture; Remains in Yukawa-Jinja Shrine, Wakayama Prefecture; Remains of Dazaifu Site, Fukuoka Prefecture; Remains in Tsukushi Area of Kyūshū University, Fukuoka Prefecture; Remains of Nagano, Fukuoka Prefecture; Remains of Tsujita-nishi, Fukuoka Prefecture.

Wooden Documents Excavated before 1977 (4)	87
Nara Palace Site (South Area of 22nd, 27th, 28th and 29th Excavation), Nara Prefecture.	
Genealogy of Wooden Documents for Charms.....Atsumu Wada	97
Wooden Documents and Ancient Literature	
—Tax Tallies for Aquatic Products— Hiroyasu Kotani	137
Outline of Excavated "Urushi-Gami" (Paper Permeated with Japan)	
Documents Sōjun Satō.....	152
Collection of Reports	

Published by

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八二年十一月二十日 印刷
一九八二年十一月二十五日 発行

〒 630
奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

編集発行

木 简 学 会
鬼頭清明 気付
会长 岸俊男
会

TEL (073) 三四一三九三一
振替口座 京都一五二七

京都市下京区油小路弘光寺上ル

TEL (073) 三五一六〇三四
眞陽社

印 刷

